

令和6年1月18日

第73回全国英語教育研究大会（愛媛大会）報告

外国語科
石原 慎吾

- 1 日程 令和5年11月24日（金） 松山市民会館
9:30～10:45 総会
10:55～12:25 記念講演
13:55～14:45 小学校ビデオ授業
15:00～15:55 中学校ビデオ授業
16:10～17:05 高等学校ビデオ授業
令和5年11月25日（土） 愛媛大学
9:00～13:00 分科会

2 各講演，授業報告（分科会を除く）

①記念講演

演 題 『令和の日本型教育』における英語教育の在り方ー期待と課題ー
講 師 文教大学大学院教育学研究科 教授 金森 強 先生
講演概要

・令和の日本型教育とは？

英語教育をとりまく日本の現状として、①低所得者のうち、66.8%が習い事をあきらめなければならず、そのため英語を学校でしか学ばない生徒が多い現状（英語の偏差値と総合偏差値の相関が高い）、②少子化なのに、不登校生徒が増えている現状、③8割の小中学校で、本来配置される教員が配置されていない現状がある。

このような状況を踏まえ、令和の日本型教育は、should be（こうあるべき）という授業ではなく、can be（あり得るべき）授業という考え方で見ていく必要がある。午後の小・中・高校の授業は、この講演内容を思い浮かべて視聴してほしい。内閣府政策パッケージでは、今後の教育は「子供目線」で行い、既存スキームに囚われない、時にアジャイル（試しながら機敏に柔軟に）に行う在り方が指針として示されている。

・生成AIを用いた授業例

「会場の先生方に『ニューヨークのニューヨーカーがニューヨークで New York Times を入浴しながら読んでいる。』を英訳してください。」という導入から始まり、生成AIに作成させたその文の画像をスライドで提示された。この例から、今後の授業展開の一つとして、タブレットで生徒が作った英文をAIに画像変換させ、隣の生徒にその英文を言わせたり、書かせた後に、英文を確認する活動ができることを例示してくださった。この他、AIを利用すると、生徒のレベル別に教材を作ることができるメリットがあることや、生徒が書いた文を Deep-L で”make it academic.”とすると、本人の書いた文を論文等で使える文を作成してくれ、知的な広がりを持たせることができるという紹介があった。また、先進的な例として、成田国際高校の「AIを用いた授業」や鹿児島大学附属中の「メタバース空間を用いた英語

授業」の紹介があった。生成AIに生成AIができない能力が何かを聞いてみると、「創造力」、「共感力」、「表現力」、「人間関係形成力」だという。生成AIが学校教育に導入されていくこれからの授業では、指導者が、そのようなAIにはできない英語のスキルを育む指導観をもって行うことが大事である。

・ **Repeating new words out loud isn't the best way. It's not so effective.**
(新出単語は、repeat して声を出すだけでは定着につながらない)

授業の導入で新出語を先生や音声の後にリピートさせて終わりというパターンが多く見られるが、生徒のインプットにはつながっていない。生徒のインプットにつなげるためには、repeat より repetition を重視することが大事である。例えば、日常頻繁に使用される語彙や文法を含んでいる様々なテーマの教材に触れさせることによって、その語彙や文法に繰り返し触れさせたり、英英辞典や同意語、対義語等を使って語句を定着させる指導が大事である。

・ **メタ言語能力を育むために、3言語以上に会い、使用する機会を増やす必要あり**

ヨーロッパ出身の学生が、英語以外にその他の言語も習得している例が多いのは、地理的な理由もあるが、言語を学ぶ本当の楽しみがわかっているのが大きな理由である。3言語以上の習得によって、言語の成り立ちや基本構造が認識され、それがメタ認知として培われ、それぞれの言語が相乗的に習得されていくのである。日本人が英語に苦手意識が強いのは、そういった言語を学ぶ本来の楽しみがわかっていない学習者が多い可能性が高い。従って、今後の日本の外国語教育では、そのような3言語以上の習得がなされるような政策がなされるべきである。現在、立川国際中等教育学校では、中学からの6年間で多言語を習得するプログラムが生まれおり、注目されている。

・ **観点別評価における指導の注意点 (Good Listener, Good communicator を作る)**

思判表を評価する際、鍵となるのは”what to say”と”how to say”という視点である。目的、場面、状況において、内容をよりよく伝えるためには、「何を」、「どのように」伝えさせるかという視点が大事である。また、その伝えた内容を受け止めてくれる友達、先生の存在が大事である。ただし、知技が思判表を支えていることも忘れてはならない。

思判表、学びに向かう態度共に向上させるには、集団での自尊感情 (collective self-esteem) を持たせる指導が大事である。それが自己効力感 (self-efficacy) につながっていく。そのために、令和型の英語教育では、生徒の「聞き解く」力を育成することに主眼を置きたい。「聞き解く」力とは、「①考えながら、②認めながら、③反論しながら、④まとめながら、⑤共感しながら、⑥批判しながら」、耳と目と心で相手の話を受け止めるということである。

これらの指導の観点を持った上で、学びに向かう態度では、中間評価の reflection の際、ワークシート等を用いて、生徒に振り返りをさせ、英語力の向上に向けて、自分自身が「何に気づいているか」を評価の対象とし、学びの調整、再構築を行わせた

い。それが生徒自身の「メタ認知」に気づかせる指導となる。

・ Speaking, Writing における指導の注意点（社会的な話題）

スピーキングやライティングの評価において、事前にお題を与えて評価すると、ものすごく上手な英文を書いている場合がある。しかし、その後その内容について英語で聞いてみると、うまく答えられないケースが多い。それは、自分の考えではない英語で書きやすい内容を事前に準備していたり、塾等で習ったことをそのまま丸暗記していることが考えられる。このことから即興的に書かせたり、離させたりする指導と評価も取り入れることで、生徒の本当の英語力を測る必要がある。

しかし、即興性を勘違いしてはいけない。全国学調の調査で、社会的な話題の speaking の正答率が 4.2% というデータがでている。このことから、社会的な話題にたくさん触れさせ、それに対しての自分の考えを表現させる活動をもっと増やしていかなくてはならない。それと同時に、OREO (Opinion, Reason, Example, Opinion) の文構造やディスコースマーカ―を常に意識させ、伝えやすい文を話したり、書いたりするように日頃から指導しておくことも重要である。

最後に、社会的な話題についての思判表の問題を作成する上で、教育心理学者の Bloom が考案した Taxonomy という教育分類目標を元に考案することは重要である。Taxonomy は学習者が知識やスキルを習得する過程を「知識→理解→応用→分析→統合→評価→創造」の順番で定義している。自由英作文や即興的な会話を評価する際、重要なのは教員の発問である。学習で得た知識や理解を元に、最終的には「創造力」を見る課題を与えて評価していきたい。

② 小学校ビデオ授業

テーマ コミュニケーションのよさや楽しさが実感できる外国語学習

授業者 松山市立福音小学校 井上 仁司 先生

助言者 愛媛大学教育学部 池野 修 先生

授業概要 1 単元目標

理想とする「20 年後の福音タウン」にあったらよいと思う施設や建物の場所や、それらを選んだ理由などについて、既習の表現を用いてその場で質問をしたり、受け答えができる

2 授業の感想

ALT の先生とのチームティーチングで、机を使用せず、導入から椅子に座って挨拶をしたり、既習の表現事項を確認していた。授業では、教室 2 部屋分くらいある広い部屋を使用し、置かれている大きな机を一つの街区と見立てて、”Go straight for ○○ blocks”や” Turn right / left”などを使って目的地へたどり着くことを目標に一生懸命英語を話していた。目的地へ着くと、”We have special rare ~”という表現を

使って、20年後の福音タウンにあったらよいものについて英語で元気よくやりとりをしていた。このような英語での積極的に対話する姿勢が身につけば、中学・高校と意欲的に英語学習に取り組む生徒がたくさん増えると感じた。

③中学校ビデオ授業

テーマ 生徒のコミュニケーション能力を育む領域統合型言語活動の実践

授業者 砥部町立砥部中学校 折本 崇 先生

助言者 愛媛大学教育学部 立松 大祐 先生

授業概要 1 単元目標

広島原爆について描いた絵本『かあさんのうた』を英訳した”A Mother’s Lullaby”という教材の学習を通して、概要や要点をつかみ、英語を通して戦争の回避や世界平和の重要性についての思いや考えを伝えあうことができる。

2 授業の感想

授業展開は、①Small Talk, ②物語の振り返り (Retelling), ③ミニ・レッスン (前回のリテラチャー・サークルの振り返り[全体]), ④リテラチャー・サークル[グループ], ⑤報告会 (全体), ⑥学習の振り返り (個人) という流れであった。

①では、”Do you think Japan is a peaceful country?”というお題をもとに生徒がペアで対話を行った。その後、”What do you do when you feel peace?”というALTの先生からの発問に生徒たちはスムーズに答えており、日頃から訓練されている様子がうかがえた。

②では、ALTの先生の内容発問に対して、生徒がThat’s whyなどのディスコースマーカ―を用いて答えている姿が印象的であった。その後、提示された絵やキーワードを使って、リテリングをしながら場面要約を行っていた。

③では、前回行ったリテラチャー・サークルのビデオを見て、折本先生が日本語で生徒にフィードバックをさせていた。この振り返りによって、生徒の中でメタ認知が形成され、英語力の向上につながっているのではないかと感じた。

④のリテラチャー・サークルでは、生徒が4人グループを作り、Summarizer (物語の要約を説明する役割), Illustrator (事前に描いてきたイラストの説明をする役割), Questioner (質問リストから質問する役割), Connector (自分の経験を話す役割) に分かれて活動を行った。Summarizer に対し、他のメンバーが”Your summary is clear and easy to understand”と応答したり、Illustrator の絵に対して、既習事項の”It reminds me of~”という表現を使って説明したり姿が印象的であった。ここに、金森教授が講演で語っていた、「集団的自尊感情」を高めるための「聞き解く力」を育むしかけがされていることを感じた。さらに、Connector が現在引き続く Ukraine や Israel の戦争の例を引き合いに出して、本文のような平和への思いが、現代にも通じてほしいという願いから”I hope this will be the small step for the peaceful world.”と語っていたのは、伝える力、考える力ともに素晴らしいものを持っていると感じた。

⑤では、各グループで出した内容を全体で共有し、⑥で自分の学習の軌跡を記録に残

していた。1年時から系統立てて、振り返りを行っているようで、自己の英語力の成長に役立っているようであった。生徒たちは、英語学習を通して、「聞き解く力」を身に付け、英語力のみならず、人間力が育っており、素晴らしい授業を見させていただきありがとうございました。

④高校ビデオ授業

テーマ コミュニケーションへの主体的な姿勢を促す授業実践

授業者 愛媛県立松山北高等学校 濱松 久美子 先生

助言者 文教大学 金森 強 先生

授業概要 1 単元目標

「身近にひそむジェンダーバイアスとその解消に向けた取組」をテーマとし、身近なジェンダーバイアスについてプレゼンテーションを作成し、台湾の高校生と共に、自分たちが取り上げたジェンダーバイアスについて発表し合い、その課題と解消法について意見交換をする。

2 授業の感想

授業展開は、①Warm up (ジェンダーバイアスについて英問英答の対話)、②ZOOMで台湾の高校生と意見交換 (事前に準備したプレゼンの紹介後)、③ZOOM 終了後、日本の生徒同士で意見交換の内容の共有という流れであった。

濱松先生は、日頃から授業内外で生徒と極力英語を使うように心がけており、自身が間違いを気にせず、楽しんでコミュニケーションを図る姿を意識的に見せることで、生徒たちのモデルとなるように努めているようだ。その姿が、授業の随所で見られ、生徒たちも集中して先生の英語に耳を傾けていた。

②の意見交換では、台湾の松山高校 (ほぼ同じ名前!) の生徒の英語の流暢さに驚いた。松山北高校の生徒も英語で一生懸命くらいついていたが、考えたこともない質問をされた時、沈黙が長くなってしまいうのが、多くの日本の高校生の英語力の現状であり、本校生が同じ取り組みをしたとしても、同じ状況になるであろうと感じた。金森先生の講演で社会的な話題についてのスピーキング力が弱いという指摘があったが、海外の同年代の高校生の応答力のレベルを考えたときに、ジェンダーバイアスのような問題にも即興ですらすら意見を出せる生徒の育成が、今後の日本の英語教育の喫緊の課題だと痛感した。

50分という短い時間で、③のような ZOOM の意見交換のあと、日本人の生徒同士で振り返りをさせているのは、重要な feedback を与えていると思った。この経験を通して、「生徒たちはこのままのレベルではいけない」と強く感じ、海外の同年代の生徒と対等に意見を交わせるようになりたいという意欲向上につながっていたようである。技術的に可能であれば、本校生もこのような取り組みを姉妹校や提携校と定期的に行えれば、生徒の英語学習へのモチベーションにつながるのではないかと思った。